様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１６６５９

研究課題名（和文）現代インド・英国のカーストとダリト運動をめぐるグローバル化の重層的展開

研究課題名（英文）Multiple Transformations in the Caste and Dalit Movements in Globalizing India and the UK

研究代表者
鈴木　真弥（Suzuki, Maya）

東京外国語大学・その他部局等・研究員

研究者番号：３０７２５１８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はグローバル化の趨勢が指摘されるインドにおいて、急速に変貌しつつあるカーストとダリト運動の動態を検討すると同時に、英国のダリト移民にも注目することで、人びとのカースト意識やダリト運動の展開に与える影響を検討した。バールミーキ・コミュニティを事例として、インドで1990年代以降から試みられてきた公益訴訟という手法を活用して自コミュニティの権利や不平等を訴える動きを分析した。さらにバーミンガムのバールミーキ移民に着目し、ライフヒストリー、カースト差別の経験、カースト別の宗教・社会活動を検討することにより、英国のカースト問題や国境を越えた運動のネットワーク形成の可能性と課題を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
カーストは人びとの日常生活に関わる問題であるが、その実態を理解することは、統計資料も少なく困難である。本研究の成果は、これまで蓄積されてきたインド国内を対象としたカースト、ダリト運動の研究に加えて、グローバル化の観点からインド国外の事例（イギリス）も検討することにより、従来の研究であまり焦点化されてこなかったダリト移民の歴史と移民の反カースト運動への関与を示し得たことである。国境を越えて、故地と移民先をつなぐ人的、資金面でのネットワーク形成、自カースト・コミュニティと深い関わりをもつ詩聖崇拝がインドとイギリスの両国でも観察されたことは、現地調査の成果といえよう。

研究成果の概要（英文）：This study examines the impact of globalization on caste and Dalit movements in contemporary India and the UK, using a case study of the Balmiki community. In India, it is noteworthy that public litigation activities, as a new form of manifestation of inequality and injustice, have been increasingly observed among the Balmiki community since the 1990s. This study reveals the awareness of justice and rights from interviews with the Balmikis in North India.
For further research, this project expanded the field to the UK. Caste practices are not uncommon and have been widely observed in British Asian communities. Based on interviews and extensive fieldwork in Birmingham, where most of the Dalit diaspora settled and established religious caste organizations, this study explores their migrant experiences and sociocultural connections across geopolitical boundaries and organizational challenges against caste hierarchies.

研究分野：地域研究、社会学

キーワード：南アジア　インド　カースト　ダリト運動　グローバル化　移民　イギリス　経済自由化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

現代インド社会において、カーストは人びとのアイデンティティの拠り所となっている［Fuller ed. 1996; Gupta ed. 2004; Jodhka 2015; Natrajan 2012］。また、ダリト内部でもカースト間の格差が存在し、運動においてもカースト区分を越えた連帯が成立しがたい状況にある。こうしたカーストをめぐる社会状況を理解する試みにおいて、先行研究では、1990 年代以降に本格化した経済自由化政策とグローバル化が与える影響に対する分析を十分に深めているとは言い難い。そこで、インド国内の事例に加えて、国外で居住するインド系移民のカースト意識やダリト運動のネットワーク形成の要素を取り入れる本研究の視点は、1990 年代以降の社会状況を把握するうえで重要であると考え、本研究課題を設定するに至った。

本研究計画の立案に示唆を与えた研究として、イギリス人研究者の著作［Leslie 2003］が挙げられる。同書はイギリスに移住したダリト（バールミーキ・コミュニティ）に注目した先駆的研究の一つとして位置づけられる。

２．研究の目的

本研究がめざすのは、1990 年代からグローバル化と経済自由化の趨勢が指摘される現代インドにおいて、急速に変貌しつつあるカーストとダリト運動の動態を捉えると同時に、他地域の状況にも目を向け、インド国外に居住するインド系ダリト・コミュニティにも注目することで、地球規模で生起している動きがカースト意識やダリト運動にどのような影響をもたらしているかを実証的に解明することである。申請者が従事してきた調査地（北インド）に加え、旧宗主国としてインドと歴史的関係の深い、南アジア系移民を多く抱えるイギリスの動向にも着目する。トランスナショナルな反カースト運動の展開を明らかにする基礎的研究をめざす。

３．研究の方法

本研究では、トランスナショナルな反カースト運動の展開を包括的に解明するために、4 つの研究主題を設定した。【主題 A】イギリス植民地における不可触民解放運動の後に登場してきた B.R.アンベードカル以降のダリト運動を取り上げ、とくに 1990 年代以降の政治社会分野における活発化に着目しつつ、現代のダリト運動の射程について検討する。【主題 B】ダリト運動の「多様化」と「個別化」の傾向をバールミーキ（清掃カースト）の事例から考察する。【主題 C】経済自由化がダリトの人びとに与える影響の検証をバールミーキが「伝統的」職種として従事してきた清掃労働の観点から分析する。【主題 D】グローバル化がインド国内外のダリト運動にどのような変化をもたらしているのかについて、人権をキーワードにトランスナショナルなネットワークを形成しつつある運動組織の活動から実態を明らかにする。

上記 4 つの主題を検討することで、現代インド社会におけるカースト意識、ダリト運動の実態をこれまで調査してきた北インドだけでなく、国外の事情も含めることで、包括的に把握することが可能になると考える。

（1）先行研究の整理と検討

【主題 A】に関しては、近年多くの研究成果が出されている。政治分野に関しては［Jaffrelot 2011］が北インドのダリト、後進カースト（OBC）の事例を検討している。ダリトのカースト的アイデンティティがどのように形成されるかを論じた研究には［Narayan 2006］がある。代表的な著作を参考にし、ダリト運動の歴史的展開を確認した。加えて、調査対象とするインドのバールミーキの運動に特徴的な公益訴訟の観点から、司法分野とダリトに関する著作も参照した。

【主題 B と C】については、本研究が事例とするバールミーキにアプローチした最近の研究はまだ少なく、現地調査における資料収集と聞き取り調査によって分析を試みた。

【主題 D】に関する 2000 年代以降のダリト運動の新しい動きとして、カースト問題をインドの「国内問題」にとどめず、人種差別のひとつとして取り組むべきだという主張がインド国内外に居住するダリトの活動家によって提議されるようになった。国連をはじめとする国際的機関によって、カースト問題が人権問題として取り上げられる展開を検討している著作［Natrajan and Greenough eds. 2009; Thorat and Umakant eds. 2004］をまず参考にした。この分野の研究は近年積み重ねられており、本研究を進めるうえで示唆に富む。

（2）現地調査

本研究では、インドとイギリスにおける人びとのカースト意識とダリト運動の今日的動態をテーマに掲げているため、現地調査に多くの時間を割いた。インドでは、デリーとアムリトサルを調査地として、文献調査のほか、運動組織の指導層と参加者、清掃労働組合の幹部にインタヴューを実施し、活動の参与観察を行なった。なお、当初の計画ではプネーを調査候補地としていたが、グローバル化の影響という観点においては移民を多く送り出しているパンジャーブ州の方が研究課題の推進により適していると判断し、パンジャーブ州アムリトサルに変更した。

イギリスでは、当初ロンドンを調査拠点として検討していたが、プレ調査の結果や現地研究者の助言を踏まえて、ダリト移民が多く、寺院を拠点にした運動が活発に観察されるバーミンガムと隣接するコヴェントリー、ウォルヴァーハンプトンの地域をおもな調査地に設定し直した。寺院兼カースト団体の指導層とメンバーの生活調査とライフヒストリー、運動への参与に関するインタヴューを実施した。インドとイギリスの現地調査を通じて、多くの現地研究者に出会い、

調査の助言やテーマに関する意見交換の機会を得ることができた。

４．研究成果

本研究は、現地調査によって具体的な事例を分析することにより、以下のような成果が得られた。

（１）現代ダリト運動における「多様化」、「個別化」の傾向

近年のダリト運動の特徴、傾向としてしばしば指摘されるのは、各カーストごとに自コミュニティのイッシュー、権利を主張する運動の「多様化」、「個別化」がみられることである。その背景を明らかにするために、代表者が博士課程から継続的に現地調査をおこなってきた首都デリーを中心として、不可触民のなかでもとりわけ厳しい差別を受けてきたバールミーキの事例を分析した。ここで注目されるのは、カースト内の弁護士や医師、上級公務員（退職者）のリーダーシップのもと、公益訴訟という司法分野での働きかけを活用して、留保制度の見直しや福祉政策の充実を要求する運動が近年活発化していることであった。ダリト内部が一枚岩ではなく、全インド的なダリト運動が出現していないなか、特定の地域、特定のカーストを支持基盤とする限定的なダリト運動が多く存在する。バールミーキの運動も、そうした流れに位置づけられるが、本研究が新しい知見として示し得たのは、ダリトのなかでも人口規模、社会経済的立場の面でもマイノリティとされるバールミーキのようなコミュニティがとる運動戦術として、公益訴訟という司法分野で救済を見いだそうとしている点である。なぜ公益訴訟という手法をとるのか。その理由は、指導層へのインタヴュー調査によって、「訴訟は政治活動と比べて費用が少なく済む」、「訴訟経緯や判決が新聞や SNS などのメディアをつうじて広く伝わり、インパクトが大きい」などの理由が確認された。また、こうした活動と指導層のネットワークが、国境を越えて、グローバルに展開している様相も指摘された。ただし、公益訴訟運動の浸透がコミュニティのエリート以外の階層や世代、そしてカーストの差異を超えて支持を獲得しているかについては、検討の余地がある。今後の展開を注視していきたい。

（２）経済自由化がダリトに与える影響

（2）のテーマは、代表者が博士論文の研究で明らかにしたデリーのバールミーキに関する世帯調査の結果に着想のヒントを得た。そこでは、バールミーキの清掃部門への高い集中と女性労働者のインフォーマルセクターへの従事が男性より高いこと、臨時雇いが多いという雇用の不安定化が明らかにされた。ダリトに独特な問題として、「不浄」な職業との関連があるが、清掃業（とくに汚物処理）はその最たるものである。同様の職業として皮革業があるが、両者を比べた場合、対照的な状況が確認される。チャマール（皮革カースト）は、皮なめし産業の衰退にともない、生業からの離脱をほぼ達成している。バールミーキの低教育と他の産業への進出の遅れは、従来からの「バールミーキ＝清掃カースト＝ダリト」とする範疇化を一段と強め、清掃カーストの「実体化」が極まる要因にもなっている。さらに、経済自由化路線のもと、デリーでは 2000 年以降、清掃部門の民営化が進められている。世帯調査からも臨時雇用の割合が多く観察されたが、今後も雇用の非正規化が拡大していくことが予想される。2010 年代に入ると、その動きはさらに加速していることが確認された。自治体清掃職の民営化は、雇用の非正規化と労働組合の弱体化をもたらし、清掃職に従事してきた多くのバールミーキが生活不安に直面している。清掃業に従事するバールミーキの人びとは、数か月にわたる賃金の未払いやユニフォーム、清掃用具の支給を停止するようになったデリー市自治体の対応を政府や市民社会に訴える手段として、公益訴訟を活用したり、路上でストライキを行なっている。こうした状況は、デリーのみならず、他地域でも起きていると予想され、本研究ではパンジャーブ州のアムリトサル市内の自治体清掃人居住区においても聞き取り調査を行った。新しい試みのため、デリーで実施した調査よりも少ないインタヴュー件数となったが、清掃人居住区において、非正規の世帯は正規雇用の世帯と比べて厳しい生活状況が確認された。

アムリトサルにおける調査では、イギリスの事例と関連するヴァールミーキ詩聖信仰と寺院建設の活動が活発に行われていることも明らかにされた。ヒンドゥー教や仏教は異なる宗教社会活動が模索されている様相を検討し、イギリスに移住した自コミュニティとの人的、資金面でのネットワーク形成が試みられている様相が明らかにされた。

（３）ダリト移民による「グローバルな反カースト運動」の検討

2000 年代以降、「ダリト運動のグローバル化」と称せられる現象が顕在化している。2001 年、南アフリカ・ダーバンの「人種主義、人種差別、排外主義および関連する不寛容に反対する世界会議」を契機に、カーストを人種に置き換えて、グローバルな人権保護の枠組みで捉え直し、カーストにもとづく差別や暴力問題の解決に向けて、政府が取り組む必要性を主張する動きがインド国内外に居住するダリト運動組織と活動家によって活発に展開されている。「global justice movement」 [Hardtmann 2009]として着目され、国連、国際開発・人権 NGO、欧州政府機関を介して、インド政府に圧力をかける政治的戦略ととらえることができる。この動きを、社会経済的に地位を確立したインド国内のダリト活動家、その運動組織と欧米在住のダリト移民が協働した結果と指摘する先行研究もあるが[Kumar 2003,2004]、本研究では、現地調査による具体的な事例から検討を行なった。

パンジャーブ地域出身のバールミーキ移民が多く居住しているイギリスを事例に、バーミンガムとその隣接地域を拠点として、生活調査、移民第1～第3世代のライフヒストリー、ヴァールミーキ詩聖信仰とその寺院兼カースト団体の活動、トランスナショナルなカースト的ネットワークの形成について、寺院執行層とその家族にインタヴュー調査を実施した。そこでは、プライバシー保護の観点から、出自カーストにかかわるとしてインタヴューを断られるケースも度々あり、調査の遂行において困難も生じた。本研究プロジェクトによって、4年間、毎回2～3週間程度の調査ではあったが、毎年調査地を訪問することが可能となったおかげで、インフォーマントとの信頼関係を徐々に築くことができた。プロジェクトの後半では、インタヴュー調査の対象を広げることができ、とくに寺院活動の前面にあまり出てこない女性たちにライフヒストリーの聞き取りを実施できたことは非常に貴重であった。従来の南アジア移民研究、シク移民研究には、ダリトと女性への視点が抜け落ちており、現地調査によって、1950年代にインドや東アフリカ、東南アジアを経由してイギリスに移り住んだ当時の社会的、経済的状況が明らかにされた。カースト別の寺院建設については、「イギリスに来た頃（1950年代）は、街にグルドワーラーは一つしかなかった。その頃はカーストの出身も関係なく、みんな助け合って暮らしていた。でもしばらくしてコミュニティが大きくなってから（1970年代）、それぞれのカーストごとにお寺を建てることになった」との回答が確認された。カースト別の住み分けや結婚状況は、世代や階層などによっても様相は異なる。また、ダリト移民にはアイデンティティの複層性がみられ、とくに若者世代においては、British/Indian/Valmiki というナショナル、ローカルな自己認識が、他者による表象とのせめぎあいの中で複層的に形成されていることが分かった。

ダリト移民による「グローバルな反カースト運動」の分析について、インドとイギリスのダリト組織の指導層間で、人的、資金面のネットワーク形成が試みられる状況は確認された。しかし、持続的で確立されているとは言い難く、インターネット上の情報と現地で行なった聞き取り調査の結果は必ずしも一致しているわけではなかった。たとえば、「故郷」のパンジャーブ（アムリトサル）にヴァールミーキ詩聖寺院を建設する運動においては、寄付金の送金授受をめぐって、イギリス側とインド側のコミュニティの認識が異なることが確認された。

ダリト移民の出自カースト、世代、階層によってカーストや運動に対する意識、手法も異なる。たとえば、海外のダリト移民による運動で主導的立場にあるラヴィダーシア・コミュニティは、ラヴィダース詩聖信仰を掲げて、その人口規模と資金力を活用させて、上位のカーストであるジャート・コミュニティとの対決を鮮明にしている。こうしたカースト間のポリティクスについても、ローカル／ナショナル／グローバルな文脈で詳細に分析し、研究を深化させる必要性を認識するに至った。

本研究によって得られた成果は、現地研究者にも新たな知見として注目されていることが、現地で開催された研究会や国際会議、国際学会の質疑応答で確認された。今後は英語論文として刊行し、意見交換を行った現地研究者と国際共同研究の将来的可能性について検討を進めたいと考える。

＜引用文献＞

Fuller, C.J. ed., 1996. *Caste Today*, New Delhi: Oxford University Press.

Gupta, Dipankar ed., 2004. *Caste in Question: Identity or Hierarchy?,* New Delhi: Sage Publications.

Hardtmann, Eva-Maria, 2009. *The Dalit Movement in India: Local Practice, Global Connections*, New Delhi, Oxford University Press.

Jaffrelot,Christophe, 2011. *Religion, Caste and Politics in India*, London: Hurst.

Jodhka, Surinder S. 2015. *Caste in Contemporary India*, New Delhi: Routledge.

Kumar, V. 2003. “Dalit Movement and Dalit International Conferences,” *Economic and Political Weekly*, 38(27): 2799.

Kumar, V. 2004. “Understanding Dalit Diaspora,” *Economic and Political Weekly*, 39(1): 114-116.

Leslie, Julia, 2003. *Authority and Meaning in Indian Religions: Hinduism and the Caste of Valmiki*, Aldershot: Ashgate.

Narayan, Badri, 2006. *Women Heroes and Dalit assertion in North India*, New Delhi: Sage Publications.

Natrajan, Balmurli and Paul Greenough eds., 2009. *Against Stigma*, New Delhi: Orient Blackswan.

Natrajan, B., 2012. *The Culturalization of Caste in India,* Abingdon: Routledge.

Thorat, Sukhadeo and Umakant eds., 2004. *Caste, Race and Discrimination: Discourse in International Context*, New Delhi: Indian Institution of Dalit Studies.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Maya Suzuki	４．巻 96
２．論文標題 Exclusivity rather than Inclusion: Dalit Assertion in Contemporary Urban India	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Senri Ethnological Studies 96: Structural Transformation in Globalizing South Asia	６．最初と最後の頁 109-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　3件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 鈴木真弥
２．発表標題 現代インドのカースト、ダリト（旧不可触民）の声と運動の視点から
３．学会等名 かわさき市民アカデミー2018年度前期世界史講座『インド史』（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Maya Suzuki
２．発表標題 Contesting Justice and Dalit Rights in the Post-Ambedkar Era
３．学会等名 INDAS-South Asia/Martin Chautari), International Symposium “Peaceful Development of South Asia”（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Maya Suzuki
２．発表標題 Transnational Anti-caste Movement and identity in British Society
３．学会等名 10th International Convention of Asia Scholars (ICAS)（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Maya Suzuki
２．発表標題 Law and Justice from the Bottom: The Public Interest Litigation Movement in Contemporary India
３．学会等名 The Third International Sociological Association (ISA) Forum of Sociology（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 鈴木真弥
２．発表標題 カースト差別、格差に抗う――デリーからロンドンへの道
３．学会等名 大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター・市民アカデミア講座『インド万華鏡②――衣食住から紡ぐ多文化共生世界』大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 鈴木真弥（コーディネーター）
２．発表標題 インド万華鏡②――衣食住から紡ぐ多文化共生世界
３．学会等名 大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター・市民アカデミア講座（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Maya Suzuki
２．発表標題 The Transnational Anti-caste Movement and the ‘Confused’ Identity of the Dalit Diaspora in the UK
３．学会等名 The 10th International Convention of Asia Scholars (ICAS)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 鈴木真弥
２．発表標題 現代ダリト運動におけるグローバル化とローカルな実践の重層的展開――イギリスのダリト移民調査から
３．学会等名 2019年度第六回FINDAS研究会（本科研16K16659と共催）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計4件

１．著者名 Maya SUZUKI	４．発行年 2018年
２．出版社 Palgrave Macmillan	５．総ページ数 169-189
３．書名 “Justice and Human Rights at the Grassroots Level: Judicial Activism by the Dalits” in Tatsuya Yamamoto and Tomoaki Ueda (eds.) in Law and Democracy in Contemporary India Constitution, Contact Zone, and Performing Rights	

１．著者名 インド文化事典編集委員会編	４．発行年 2018年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 770(46－47，312-313，424-425)
３．書名 インド文化事典	

１．著者名 石坂晋哉・宇根義己・舟橋健太編	４．発行年 2020年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 304（259－262）
３．書名 ようこそ！南アジア世界へ――地域研究のすすめ（執筆箇所：第12章第5節「南アジア系移民の世界」）	

１．著者名 Awaya, Toshie, Tomotsune, Tsutomu and Maya Suzuki (eds.)	４．発行年 2020年
２．出版社 The Center for South Asian Studies, Tokyo University of Foreign Studies	５．総ページ数 69
３．書名 Examining Stigmatization of Leather Industry: By Focusing on the Labor Forms of Dalits and Buraku (FINDAS International Conference Series 4)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

単著の鈴木真弥、『現代インドのカーストと不可触民――都市下層民のエスノグラフィー』
慶應義塾大学出版会、2015年刊行は、2016年11月に、第11回樫山純三賞および第28回アジア・太平洋賞特別賞を受賞した。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考